

発表題目：親和的關係における否定的評価
—日本人・韓国人の母語話者同士の会話から—

発表概要

1. セミナーでの発表内容

①研究背景

人々は、ことばを通して、相手との距離を近づけたり、相手との距離を維持したりする。例えば、タメ口になる・相手をほめるなどの行為は、相手との距離を近づける言語行為になるだろう。しかし、このような言語行為は、言語文化圏により表現の仕方や認識が異なるため、異文化場面では、誤解が生じる可能性がある。日本人と韓国人も言語行動に違いが観察され、このような対照研究が数多くなされている。しかし、ほとんどが初対面の会話を対象としており、親しい友人同士の会話にも注目する必要があるだろう。

②修士論文の内容

修士論文では、親しい友人同士の中で行われる「否定的評価（けなし）」の言語行為について分析を行った。否定的評価は、相手のフェイス¹を脅かす可能性が高いにもかかわらず、友人同士では、それを行うことで、親近感を表すことになり、お互いの友好的な雰囲気形成に役立つことが多い（中山 1995、大津 2004）。一方、否定的評価は、発話の状況や表現により、話し手の意図とは別に、相手を傷つける可能性もある。そのため、話し手は、否定的評価の発話を発する際、何らかの工夫を行っていることが予測される。本研究では、日・韓の各々の会話データを収集し、両国の言語話者がどのようなやりとりを行っているのか、特に否定的評価に関して日・韓の違いがみられるのか、分析することを試みた。

その結果、否定的評価を行う話者は、否定的評価の発話の際、韻律を操作したり、感情や程度を誇張したり、笑いを添えたりすることで、今行っている否定的評価が冗談であることを示すメタ・メッセージを送っていることが明らかになった。これは、リーチの『語用論』に出ている、「丁寧さの不足は、本質的に親密性のしるしとなりうる」こととも関係があるだろう。日・韓の相違点においては、個人差が大きく作用し、両国を比較することはできなかった。

また、否定的評価を行った話し手は、その後、相手のフェイスを補償するために FTA

¹ Goffman(1967) は「face」の概念を人々の基本的な欲求として捉えており、ポジティブ・フェイスとネガティブ・フェイスの二つがあるという。人々は、一般的に、相互行為の時に、互いのフェイス維持のために努力するといわれている。

補償行為²を行っているケースがみられた。その行為として、(1)否定的側面に肯定的な面もあることを述べる、(2)相手の立場から弁解する、(3)取り上げた否定的な側面に対して、自分もそうであることを述べる、(4)否定的側面が解消・改善されたことを述べる、(5)他の側面をほめる、(6)自信の判断が正しいのか疑う表現を使う、などの行為がみられた。FTA 補償行為においては、日・韓の違いがみられた。両言語共に取り上げた否定的評価を打ち消すストラテジーは、共通に多くみられるが、日本人の場合、自信をへりくだり謙遜することによって、韓国人の場合、相手の他の側面をほめることによって、FTA を補償していた。

③今後の課題

今後の課題としては、修士論文で使った会話データからみられる相互行為の特徴を会話分析の手法を使い、分析していきたい。特に、否定的評価を行う際現れる「笑い」の現象や、言いにくいことを話す場面で現れる「side sequence」の存在に関して分析を行いたい。

2. 質疑応答及びコメント

(質疑) 会話収集方法と親しい友人の定義について

(応答) 会話収集方法としては、親しい母語話者同士をペアとして、15 分間、ある話題に関して話してもらうことを依頼した。親しい友人とは、はっきり定義することがむずかしいが、会話の収集において、一方の人に、ごく親しい友人を連れてきてもらうことをお願いした。また、第 3 者が見たとき親しいと思われる友人同士に、会話調査の協力を依頼した。

(質疑) 会話調査で否定的評価の発話が出なかったペアは研究対象に入れなかったと述べたが、なぜ否定的評価がでなかったペアを分析対象として排除したのか。否定的評価がでなかった要因を探ることも必要ではないか。

(応答) 否定的評価がでなかったペアも何ペアかあった。大学院生のペアの場合、否定的評価が一つもでなかったペアが学類生に比べて多かった。しかし、個人差も大きく、二人の関係性にも大きく影響するため、要因を分析するのはむずかしいと思う。今回の調査では、否定的評価を行っているペアのみを分析対象とし、そのやりとりや言語行為を観察することが目的であった。

(質疑) 日・韓の違いとして、否定的評価後の FTA 補償行為の回数が出ている表がある。補償行為は、日本人 22 回と韓国人 15 回と示している。否定的評価数は、日本人 99 発話、韓国人 98 発話と示している。このうち、否定的評価後に FTA 補償行為がない場合は、どれぐらいあるのか。否定的評価後、FTA 補償行為がない場合はなぜなのか。

² 相手のフェイスを脅かした行為 (FTA) に対して、ボライトネス・ストラテジーを使用し、脅かした相手のフェイスを補償する行為

(応答) 否定的評価の数としては、「発話数」を単位として、否定的評価後の補償行為の数については、「言語行為」を単位として数えているので、その数を出すのは今の段階でできない。数を数える単位の統一がまず必要であろうが、ひとまとまりの談話を区切ることに困難を感じている。確かに、否定的評価後、FTA 補償行為がないのがなぜか分析するのも意味があると思うが、設定された会話であるため、話題展開が不自然なところがあり、FTA 補償行為がでなかったのは、話題がもう転換してしまったからという理由もある。今後そのような問題点を解決するため調査方法に工夫が必要であろう。